

書 評

一問一答！
腰痛のエビデンス

菊地臣一 著

菊地臣一先生のご著書『腰痛をめぐる常識の嘘』が出版されたのは、今から24年前の1994年である。その魅惑的なタイトルもさることながら、既成概念にとらわれないサイエンスに基づいた明快な内容に、当時の多くの若手医師・研究者が感化された。筆者もまさしくその一人で、同書から腰痛研究へ向かうモチベーションと多くのヒントを頂いた。主としてご自身の解剖学的・臨床的研究の所見をベースとした同書に続き、4年後に出版された『続・腰痛をめぐる常識のウソ』では、腰痛の病態、運動療法、手術療法などさらに幅広いテーマに焦点をあて、国内外の多くの研究論文に基づいた的確な検証と解説がなされていた。

それから20年を経て、『一問一答！ 腰痛のエビデンス』が刊行された。この20年間に、腰痛に関する基礎的・臨床的研究は飛躍的に進歩し、多くの新知見が得られた。治療においても、新たな薬物療法の登場や手術の低侵襲化など、ドラステックな変化が起きている。その一方で、腰痛を含めた慢性痛に対する概念、治療のゴールに対する考え方、さらには医療のあり方についても、種々の変革や問題提起がなされている。これらの20年間の進歩と流れが、本書には凝縮されている。腰痛にまつわる種々の疑問や問題点を提起し、それらに対する科学的検証を行い、結論・回答を数行以内の文章で明快に提示する、といったスタイルは前2著を踏襲している。しかし、その検証テーマは、「心理・社会的因子」から「脳内鎮痛メカニズム」、「代替療法」、「手術のジレンマ」さらには「祈り」に至るまで、より幅広く、深く、多岐にわたっている。

本書はタイトルに「腰痛のエビデンス」と謳っ

ているが、冒頭の Question 1-1「science（科学）だけで医療は十分か？」で、いきなりサイエンスに基づくEBM（evidence-based medicine）一辺倒の医療を否定し、読者の目を覚ませる。EBMの普及により、明らかにになったのは皮肉に

もNB（narrative-based medicine）の重要性である。それは先人達の築き上げてきたアート（経験知）であり、患者への共感を持つての受け入れや励まし、医師の自信に満ちた態度、そしてそこから生まれる信頼関係である、という言葉は深く心に響く。治療方針の決定に必要なものは、EBMとNBの統合であり、患者の個人的・社会的背景や価値観を尊重し、最終的には患者への説明に基づく決定（informed decision）まで踏み込む必要性を強調しておられる。近年、近い将来にAI（人工知能）が医療に深く参入することが予想されているが、それは医療にとって有用なものではあっても、決して医療に取って代わるものではないことを本書は示唆している。

1990年代に刊行された2冊のご著書がそうであったように、本書もまた、若き脊椎外科医や研究者たちの好奇心とモチベーションを大いに刺激するに違いない。そして、将来の腰痛診療ひいては医療全体の発展に寄与する、多くの優れた研究が生み出されていく契機となるものと確信する。

山下敏彦（札幌医科大学整形外科）

〔金原出版、本体4,000円〕

